

中小工場が殆どである。広い空地が少ない為である。)都市計画を見ると、都市計画街路の工事が始められていて、その一つ大宮パイパス(大宮-鴻巣間)が完成し、37年の5月に正式に開通した。

今後はさらに区画整理による宅地造成や、工場誘致に伴う工場団地の造成の計画も実施され、将来は衛星都市に迄発展することが予想される。

埼玉県東南部低湿地の土地利用

—— 埼玉県越谷市の場合 ——

船 越 浩 子

調査地域は、埼玉県東南部の利根川、荒川の造る沖積平野に在る人口51,389人(昭和36年4月現在)面積60.39 km²の越谷市。東京都心から約25 kmの地点にあり、東武鉄道利用で浅草から40分程度のところにある。元荒川が西北から東南に向って貫流、東部を古利根川が、南部を後瀬川が流れ、多くの用排水路が走っている。平坦な水田地帯が広がり、交通上の幹線となる東武鉄道、四号国道が市内を縦走し、それらに沿って市街が形成されている。近年、東京を中心とする既成工業地帯の用地的、用水的飽和状態のため、埼玉県内への工場進出は著しく、越谷市への進出工場数も、昭和34年頃を境に急増し始めた。東京に近い南部及び主要交通路に沿って都市化が進みつつあり、農村の土地利用もこうした新しい因子の導入で変わりつつある。

1. 越谷市は、河川の運搬した砂、粘土が堆積した平均海拔高度ふ.2mという沖積低地で、この沖積地の微地形分類は、低地(後背湿地、旧河道、現河道)と微高地(自然堤防、人工盛土地)とした。自然堤防は少々高く(低地との比高約0.5~2m)乾燥し砂質で、現在は、主に畑に利用され、集落や街道筋の立地となっている。人工盛土地は、進出して来る工場が水田地域に工場立地に適するよう盛土をするものである。後背湿地は、粘土質で、主に水田に利用されているが、この湿地には、沼沢植物遺体の堆積した低位泥炭地が広く分布し、土壌条件は悪く、米の反当収穫量は低い。一方この地域は、古来、河川の氾濫で知られ、このことは地域開発の中心問題であった。江戸時代に江戸の後背地の開発、洪水防禦を目的とした諸河川の付け替え工事、改修工事が行われ、用排水系統も確立された。明治以後、現在に至るまで、土地改良が進められていて、不良土地条件は、階層の如何を問わず、かなり克服され、このことは、農業への畜力、機械力の導入及び湿田の乾田化による裏作を可能にした。現在、農用地の約73%が水

田、15.3%が畑、と地形を反映している。

2. 江戸時代には、天領または旗本領で占められていて、日光街道、奥州街道の宿場所でもあって、多少の商工業（藁工品、桐単筒など）があったが、昭和30年以後、工業化が盛んになり、毎年、田畑の転用による工場地、宅地が増加している。東京都の台東区、足立区、墨田区、荒川区等の延長地域として、それらの地域からの進出工場が多いこと、水田地域であるため埋立費用がかかること、地盤が堅固でないことなどのため、企業の種類は多様で、中小規模のものが多く、進出工場は、東京に近い南部及び主要交通路に沿って多くなっている、進出工場のための条件整備も行われており、今後益々工場数が増加することが予想される、以下、都市化の影響等による農業の変化を略説してみよう。

3. 産業別人口率では、第一次産業44.4%（大部分農業）で全国平均32.8%に比し高率で、都市近郊としては高率といわねばならない。農家率45%、農家人口率55%は、東北地方平均に匹敵する。しかし、最近の傾向は、若年労働者の農業外就業の増加で、このことは、男子労働力の老令化、女子労働力の基幹化となって表われている。農家平均人口7人のうち農業従事者は3人で、農繁期の労力不足を、機械化を雇用労働力で補っている。工場地並び、住宅地率への土地売却などによる農地縮小により、農地経営規模は5反以下層の零細農家が増大し、0.5～1.5町の間層が減少している。零細農家の増加、藁工間の所得不均衡、大都市からの刺激は兼業化を必然としている。農家兼業率は61%で、第一種形態が多く、経営規模を縮小しながら飯米自給農家へと移行している。農業経営は、高所得獲得を目指す多角経営に進みつつあり、従来の稲作一本から裏作の野菜栽培、労働力の年間平均利用を計るため家畜導入等が行われていて、集約的な都市近郊的土地利用へと移って来た。殊に、減少化する土地の利用として養鶏が盛んになってきた。都市近郊に位置すること、バッテリー飼育による養鶏が以前より行われていたこと、養鶏農家稠密地域として市内の増林地帯が、県により集団モデル地区に指定されたこと、その他の条件が重なり、養鶏羽数は県内でも有数である。鶏卵の出荷は、契約した業者（東京の業者が多い）が各戸を回り集荷するもので、個人的出荷形態で、養鶏組合はあるが、現在のところ形成年代も浅いため、飼料購入が共同化されているだけである。一農家の飼養羽数は平均数百羽とみられ、養鶏の専業農家も60余戸と増加し、特産地型へと進みつつある。その他、養豚、酪農も行われているが、水田地帯という土地条件の不利さで伸び悩みの状態である。

工場進出に伴う水田の工場化が進み、水田面積の減少化が必然となってくるならば、水田の米作にのみ依存する農業から、野菜、養鶏、酪農、養豚、或は果樹栽培といった種類の集約経営による、特産地形式の方向に進むことが必要となるだろう。

—— 卒論を書くにあたり、地理学の基礎知識の不足を痛感させられた。集まった資料を充分こなせず、果して、地域性が描き出せたか疑問である。

鹿島郡神栖村の地形と土地利用

鈴木 陽 子

“地形と土地利用”という地域性を把握する上に最も基本となるテーマを選びはしたが、単に“土地利用”という場合、農業土地利用のみでなく交通、集落、etc. とその広範な範囲に圧倒され、焦点をしぼらず、あれこれ迷っている間に、月日はたち、結局土地利用と言うには余りにもお粗末な調査報告が出来上ってしまい、誠に成さけなく思っている次第である。

本論は

第1章 地域の概況

- § 1 地理的位置及び沿革
- § 2 気候 1) 一般気候 2) 特殊気候
- § 3 地形と地質
- § 4 産業と交通

第2章 地形と土地利用

- § 1 地形
 - 1) 地形区分方法
 - 2) 各地形面の記載
- § 2 土地利用
 - 1) 後進的土地利用
 - a. 経営規模
 - b. 専業農家の卓越
 - c. 水田耕作の欠如
 - d. 主要な換金作物
 - e. 不安定な農業経済
 - 2) 特色ある農業景観
 - a. 堀下げ田
 - b. ビニール水田